

令和7年度モンゴル中央県青少年派遣レポート

鳥取県米子西高等学校2年生 竹藤綾那

私は令和七年度モンゴル中央県青少年派遣事業に参加し、6月15日から20日の間モンゴルで過ごした。研修にあたり、モンゴル渡航前に2つのテーマを設定した。この設定した2つのテーマと私がモンゴルで経験したことについて書こうと思う。

設定したテーマ

- ・テーマ1「モンゴル現地での経験」
- ・テーマ2「モンゴルにおけるJICAの役割とその影響」



テーマ1「モンゴル現地での経験」

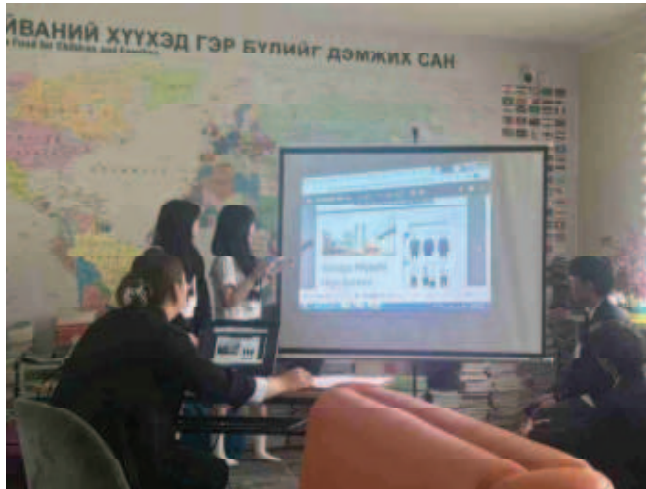
「モンゴル」と聞いて私が思い浮かべていたのは、小学生の時に音楽の授業で習ったホーミーや、地理で習った伝統的な住居ゲルなどであった。どこか不思議な生活をしている人々が暮らしている国、という漠然としたイメージしか持っていなかった。今回の研修にあたり、私は「モンゴルの人々がどのような生活を送り、どのような環境で暮らしているのか」を現地で実際に、体験を通じて学びたいと考えた。そして研修を通して得られた多くの経験を、ここにまとめた。

飛行機から地上を見下ろすと、教科書で見たことのあるゲルや放牧されている動物たちが点在していた。空港に到着し外へ出た瞬間、高地特有の気圧の変化を耳に感じて、土の香りを含んだ澄んだ空気と鮮やかな夕日がとても印象的だった。見渡す草原の緑は彩度が低く、草丈も短く、日本の風景とは全く異なっていた。空港から車で移動すると、道路沿いには馬を放牧する遊牧民の姿や、あちこちに建てられたゲルが目に入った。また、山の麓には神戸のような光が連なる夜景も広がり、遊牧的生活と都市生活が共存している様子を垣間見ることができた。

フムーン総合高校を訪問してお互いの文化や毎日の学校生活などを紹介し合った。



主な交流内容は、モンゴル側は学校紹介、書道交流、伝統舞踊・馬頭琴披露、日本側は日本での学校生活や米子の地域特色、伝統的な日本文化などの紹介だった。



米子西高校の紹介



書道交流

フムーン高校側の紹介で、世界で文字を縦に書く国は日本とモンゴルだけだと知った。現在では日本でも日本語を横方向に書くことも多いが、モンゴルでは縦に各文字と横に各文字が異なる。現在モンゴルで多くの人に使われている文字はロシア語のような横文字のキリル文字である。これは、1940年代の旧ソ連の影響下で伝統的なモンゴル文字(ウイグル文字)に変わって導入されたためである。ソ連崩壊後もウイグル文字への復興が進められたが、国民の多くがキリル文字に慣れ親しんでいたため、現在も多くの国民がキリル文字を使用してる。私達はこの縦文字であるウイグル文字を書道で書く交流を行った。とても文字として認識できないくらい難しくてとても不思議な経験だった。日本側の私達も、フムーン高校の生徒の名前を当て字で漢字で書いてあげてお互いに異なる文字の書道での交流をした。



馬頭琴

上の写真の左のフムーン高校の生徒が馬頭琴を披露した。馬頭琴とは、モンゴルの伝統的な弦楽器である。先端に馬の頭の彫刻があり、元と弓には馬の尻尾の毛が使用されている。彼が演奏した曲ではこの馬頭琴を使って馬の鳴き声を表現したり、今まで聞いたこの無いような音色やリズムでエキゾチックな雰囲気でもとても素敵だった。私にも馬頭琴を持たせてくれて、弾き方を教わった。

学校での交流の後は、フムーン高校の生徒とみんなで昼食を取った。彼らと話をしていると、フムーン高校の生徒はとても日本の高校生活や日本のアニメ、漫画、音楽に憧れを持っているような印象を受けた。日本語が堪能で、一年前に鳥取県の日野町に行ったことのある生徒もいた。英語が堪能で将来は国際的な軍事活動の仕事をしたい生徒もいたし、ロシア語が堪能で将来はロシアと関係のある弁護士になりたい生徒もいた。フムーン高校の校風は日本に比べてとても自由だと感じた。必修科目はとても少なく、自分のやりたい科目を選択して一人ひとりが個性のある専門的な知識を持っていた。また、話を聞くと、学校の夏休み、冬休みは一年の半分を占めていた。この多すぎるように見える休暇期間は遊牧民の家庭の生徒のためであり、家の手伝いで半年は、遊牧民の生活をするらしい。なので、フムーン高校の生徒は、学校の課題などはないが、たくさんの期間で自分のやりたいことを自分で見つけなければならないと言っていた。そのやりたいことを高校で学べる教育環境はとても羨ましいなと感じた。一方で、私はたくさんの課題ややるべきことが与えられているが、それはとても恵まれていることなんだなとも感じた。与えられているものに感謝して、私なりに高校生活をもっと充実したものにしたいなと感じた。生まれ育ちが違ってこうした同年代の異国の高校生との交流で心を通わせる事ができたことにとても感動し、こうした交流が世界平和の一步になると思った。

ゾーンモド市へ行き、本物の遊牧民の方と会い、遊牧民生活を体験した。



見渡す景色が本当に教科書で見たことのある雄大すぎる草原だった。どこまでも山の稜線が重なり、馬や羊が遊牧されていてゲルが集合体で点在していた。私が出会った遊牧民の方は競馬の馬の飼育をお仕事にされていて、所有されている馬の中で穏やかな馬に乗せてもらって草原を歩いた。そして、伝統的な家であるゲルにも入らせていただいた。入るとすぐにフェルトの匂いとそのゲル内部の構造のきれいさに驚いた。競馬で獲得されたたくさんの勲章が並んでいて、そのメダルは馬の彫刻で本当にかっこよかった。



ゲル



遊牧民の方が実際に食べる食事を頂いて、アーロールという硬い乾燥チーズや、バターの原料となるウルムを食べた。調味料は一切使用されておらず、本当に素朴な素材の味がした。この食事に使われたミルクは遊牧民の方の家畜のヤギのミルクから作られている。

ゲルキャンプ場へ行き、実際にゲルに宿泊した。



このキャンプ場のゲルは宿泊用だけでなく、伝統的な行事を行うためのゲルがあり、そこには本当に異国のものや空間がたくさんあった。



伝統的な楽器を使用したオーケストラ



キリル文字の椅子、フェルトのカバー、チンギスハーンの肖像



金のチンギスハーン像



祭りに使う道具



朝4時に見たゲルキャンプ場。朝日は見逃したが本当に綺麗だった。気温は日中よりずっと寒くて冬みたいだった。

テーマ2「モンゴルにおけるJICAの役割とその影響」について

まず、結論から言うとテーマ2の「モンゴルにおけるJICAの役割とその影響」について、現地での深い研究はできなかった。というのは、米子―羽田間の国内線の欠航により研修日程・内容が大幅に変更になり、研修初日に予定されていたモンゴル中央県JICAへの派遣が不可能になったからである。

私がこの研修にあたって私が最も関心のあったことは、発展途上国などでの活動を行う国際機関JICAへの訪問だった。私は中学1年生の12歳の頃、母親が持っていたドキュメンタリー映画『荒野に希望の灯をともし』を見て、日本人医師である中村哲さんが、医師でありながら大干ばつによる飢えや渇きに苦しむ人々のため、戦火が飛び交う中で用水路・井戸を掘り続けた彼の生涯に本当に心から感動した。私は幼少期から英語教育を受け、将来は国際的な仕事に就きたいことが根底にあったが、この映画を見て、より具体的に私も人々の苦しみに寄り添って支援する国際的に活躍する人材になりたい思いが強くなった。具体的には、JICA、ODAなどへの就職や海外青年協力隊への参加である。また、今回のこの研修でモンゴルという日本人の私にとって異国である場所へ実際に行き、JICAへの訪問や遊牧民生活体験を通して、憧れの中村哲さんの生き様に少しでも触れてみたい思いがあった。

私がこの研修でメインテーマにしたかったJICA訪問ができなかったことは本当に残念だった。しかしながら、学びや気づきはこの5日間の研修を通して得られ、貴重な経験となった。現地で実際に生活してみて、日本と比較したモンゴルの生活基準の低さ、日本などの先進国の技術の導入の意義を真に感じた。具体的に、都市郊外のゲル地区のトイレなどのインフラは最悪で、水道はなくトイレは汲み取り式や屋外型であった。また、私のホストファマザーはゾーンモド市で医師をされており、モンゴルの医療状況を尋ねると、若い大量の医療従事者の都市部集中により、地方の医療は深刻な人手不足で一人の医師の仕事負担が大きいこと、そもそもの医療設備が整っていないことが問題だと仰った。多くの女性が地方での出産を控えるらしい。都市部とゲル地区でのこの経済的な落差は医療にまでも影響していることを知った。

一方で、モンゴルでは今もなお多くの人々が伝統的な遊牧生活を営んでおり、その文化的価値を大いに感じた。モンゴルの遊牧民社会において、先進国の技術の導入が生活の向上に寄与する一方、伝統的な生活様式との両立は容易ではないと思う。単に新しい技術を導入するだけでは遊牧民の暮らしや価値観との間にギャップが生じてしまうかもしれない。そのため、他国の技術支援においてその国の地域の文化や生活背景を尊重したり現地の人々の声に丁寧に耳を傾けたり、ニーズに即した取り組みを行うことが大切なのではないのかなと思った。

世界のいかなる国や地域においても、独自の伝統や文化が存在しており、それは地域社会の価値観や生活様式の基盤を成している。ゆえに、モンゴルに限らず、今後、私が国際的な視野で活動する上では、単なる仕事や支援の提供に留まらず、その地域の文化・社会背景を踏まえ多面的かつ包括的な視点から支援の必要性や背景を理解する姿勢が大切なことを学んだ。